

『レフト・ビハインド』が内包している問題点の解明とその克服の処方箋—凸凹神学会講演準備ノート (11)イースター礼拝メッセージ: ラッド著、安黒務訳『終末論』第五章 再臨についてのことば、とその細部の展開である G.E.Ladd, "The Blessed Hope – A Biblical Study of the Second Advent and the Rapture : 導入、第三章「祝福に満ちた望みについての語彙」"から、ポイントを学ぶ(後半)

\*\*\*\*\*

\*

※ ユーチューブ・サイトの一宮基督教研究所の礼拝のメッセージ集の、『レフト・ビハインド』問題の解明と克服シリーズ)から漸次傾聴していくことができます。

\*

※大頭眞一先生主催の凸凹神学会(ズーム)『レフト・ビハインド』が内包している問題点の解明とその克服の処方箋)4/15(木) 13:30-15:30 に関心のある方は、大頭先生“mailto:gospel.ozu2@gmail.com”に直接お問い合わせください。

\*\*\*\*\*

2021年4月4日『レフト・ビハインド』問題—解明と克服シリーズ、(4)「イースター礼拝メッセージ: キリストのイースター(復活の日)、私たちのイースター(復活のからだを着せられる日)」

\*

#### A. 導入

今朝は、イースター礼拝の朝である。キリストが復活された朝を記念する礼拝である。さて、キリストの復活は「再臨」と深い関係あることを今朝は指摘しておきたい。キリストの復活は「初穂」と表現されている。「初穂」とは何か。それは、その初穂に続いて、大収穫が始まるということである。

キリストの復活は、キリストの再臨のときに信徒たちが「キリストの復活のからだ」を着せられ、贖いのからだ、栄光のからだに変貌させられるための“初穂”なのである。であるから、わたしたちは「キリストの復活の朝」をはるか過去に振り返り感謝するだけでなく、イースターの朝目覚めた時、即座に思い起こすべきことは、キリストの復活の出来事は、「わたしたち皆が、キリストと同じように、朽ちることのない復活のからだを着せられる」ことのためにあったのだという確信を新たにすべきなのである。イースターの朝には、再臨の日、私たちが「復活のからだを着せられる日」を目をさやかにして望み見るべきなのである。

キリストの再臨に関しては、「患難期→空中・地上一体の再臨→普遍的な神の国・また新天新地の到来」という使徒たちの捉え方と、19世紀に突如出現した英国のJ.N.ダービーたちの「突然の空中再臨と信徒の携挙→患難期とイスラエルの民の回心→地上再臨→イスラエルの栄光の回復としての千年王国・新天新地」という捉え方がある。

なぜ、このような新奇な聖書解釈が生起してきたのだろうかといぶかしく思う。クラレンス・パスという研究者は、19世紀におけるリベラル神学との戦いの最中で、リベラル神学が現世的な社会改革と倫理的・象徴的な聖書解釈と適用に傾いた反動として、ダービーたち、英国のプレザレン運動は、未来主義的な神の国待望と極端な字義主義解釈に傾いていったことを指摘している。ラッドは、「神の国の未来性」回復の強調は健全な聖書解釈の“朗報”であったが、「患難期前再臨説」の導入は不健全な聖書解釈の“悲報”であったことが今日では明らかとなっている。なぜ、このように誤った聖書解釈が出現したのであろうか。そして、なぜ今にこのような誤った解釈を唱導する「盲目的案内人」が跋扈し、素朴で純粋な信仰者たちの信仰を荒波のうたかたのように翻弄し続けるのであろう。

それは、旧約聖書の中の、「イスラエルの栄光の回復」を絶対化し、それを金貨法条とし、それを新約聖書再解釈の推進力として行使するときに生まれてくる「聖書解釈の逸脱」である。新約聖書のどこを読むにおいても、「二つの神の民、二つの神の計画

という前提で読み、解釈すべし」という聖書解釈上の“圧力”が生じている。「聖書を誤りのない神の言葉と信じるクリスチャンは、このような聖書解釈方法論を徹頭徹尾貫徹しなければならない」という圧力に支配されているのである。

しかし、「聖書を神の言葉と信じる」ということは、そのようなことを意味しているのだろうか。「聖書を神の言葉と信じていた」使徒たちは、そのような解釈を施したのであろうか。事実、実は“その真逆さま”なのである。使徒たちは、「イスラエル民族の栄光の回復」を軸として旧約聖書を解釈してはいない。使徒たちは「イエス・キリストの人格とみわざ」を軸として旧約聖書を再解釈している。リベラリズムとの健全な戦いが、「その誤り」との戦いの渦中で、「もうひとつの誤り」へと極端に振り子が振れてしまったのである。それが誤った聖書の読み方であり、「イスラエル民族の栄光の回復」を軸とした旧約聖書の解釈方法である。そして、その「イスラエル民族の栄光の回復」を軸とした聖書観をもって、新約聖書を“誤って再解釈”しているのである。

米国からの影響であろう。十年ほど前から、大津波のように「イスラエル民族を軸とした聖書解釈」がセミナーや教会集会、神学校講義、ユーチューブ・サイト等で語られ始めた。わたしの所属団体や母校もまた例外ではなかった。わたしは、そのような集会やセミナーに、主にある同労者や兄弟姉妹たちが、雪崩を打つように参加し始めたときから、バプテスマのヨハネのように「荒野に叫ぶ声」として尽力してきた。主にある戦いは、すでにカルバリの丘で決着した。いわゆる「Dデー」である。しかし、最終的な勝利の日「Vデー」まで、まだ各地域における“掃討戦”が継続する。この戦いに参戦して、十年あまりを経過した。まだ、戦いは続いている。米国でもそうであるように、知的なレベルの高い教職者や信徒の方々の間では、ダラス、タルボット、グレイスといった過去にディスペンセーション主義の牙城といわれていた神学校でも、その指導的教授陣においては、「患難期後再臨説、空中・地上一体の単一の再臨」と理解する漸進主義ディスペンセーション主義がシフトしていったと聞く。ただ、過去に古いタイプのディスペンセーション主義の教えに養われた“ダービー主義の遺伝子”を宿した大衆的な教職者や信徒の兄弟姉妹たちの間では今なお、「患難期前再臨説—すなわち突如の空中再臨・信者の携挙（不信者のレフト・ピハインド）→患難期→地上再臨」という誤った理解が蔓延している。

日本のキリスト教会、聖書学校では、このテーマでは50年遅れている印象を持っている。優れた指導的教職者と神学校に学んだ先生方や彼らに指導される教会の兄弟姉妹たちは、すでに50年前に米国で、この誤った教えの克服の取り組みがはじまった時点で、治療・回復の取り組みがなされたと聞く。しかし、あまり知的レベルの高くない教職者を多く抱える団体や聖書学校、そしてその卒業生によって養われている諸教会では、この誤った教えの「治療・回復」がなされないばかりでなく、さらにその症状が悪化する方向に向かって「さまざまなセミナー、集会、聖書フォーラム、ユーチューブ、冊子刊行」等がはでに展開され、それによりますくみしていつている姿は心が痛む。

どうして、このような誤りが大手を振って、キリスト教会の大通りで宣伝カーを大挙繰り出しているのだろうか。これに、街頭に群れを成す素朴で何の疑いもはさまない兄弟姉妹たちがシュプレヒコールを繰り返しているのだろうか。これは、今日のキリスト教会における「七不思議」のひとつでもある。

今朝はイースター。私たちが「復活のからだ」を着せられる基盤、原点が出現した記念の日である。そして、わたしたちは、レフト・ピハインドの小説のように「患難期の前に、信仰者は逃避的に携挙され、患難期から救い出され、患難期においては、イスラエルの民が患難期の最中で回心し、患難期の後に地上再臨があり、イスラエル民族中心の千年王国が到来する」といった誤った聖書解釈ではなく、使徒たちが記した通り「患難期の只中で守られ、支えられつつ、殉教をも恐れず証し、リバイバルを結実し、患難期の後、空中・地上一体の単一の再臨にまみえる。その時に、私たちは携挙され、復活のからだを着せられ、ただちに披露宴会場としての地上に主と共に降りてくる。」

さて、ラッドがその著書、「The Blessed Hope」の「第三章 祝福に満ちた望みの語彙」と『終末論』の「第五章 再臨についてのことば」等から、その誤りの一端をみていこう。

ラッド著『終末論』の第一章で論じられているように、古いタイプのディスペンセーション主義の教えでは、キリストの再臨は二つ存在する、もっと正確に言えば、キリストの再臨は二段階で起こる、と教える。古いタイプのディスペンセーション主義の教えでは、神の二つの民—つまりイスラエルと教会—が存在し、そして神は二つの異なった計画—つまりイスラエルに対する計画と教会に対する計画—を持っておられると教えている。イスラエルに対する計画は「地上の神権政治の計画」であり、教会の計画は「霊的天的な計画」である。この主張に符合するかたちで、新約聖書の再臨の教えとスケジュールに、キリストの再臨に“二つの段階”を生み出す聖書解釈の“誤った圧力”がかけられる。

古いタイプのディスペンセーション主義の教えでは、旧約聖書に預言されている「イスラエル民族の栄光の回復としての千年王国」が聖書解釈の絶対的規範として存在している。まず、そのような「イスラエル民族中心の千年王国」の到来を、新約聖書解釈の基本的枠組みとして設定し、次に「キリストをメシヤとして認めることに頑なに心を閉ざしてきたイスラエルの民が、キリストをメシヤとして認める機会」を新約聖書の中に探す努力が開始される。そして、新約聖書の基本的文脈を無視するかたちで、マタイ 24 章の「v.31 選んだ者たち」をイスラエル民族と解釈したり、ヨハネの黙示録の 4:1「ここにのぼれ」を空中再臨時の教会の携挙と解釈したりする聖書解釈上の暴挙・逸脱等が行われる。

そのような「仮説に基づく推論としての解釈」が次々と行われている。そのひとつが、「再臨について使用されている—パルーシア、アポカリュプシス、エピファネイアという三つのギリシャ語」の誤った解釈である。ラッド等、優れた神学教師たちはそれらが「患難期の後に生起する、空中・地上一体のキリストの再臨」に同じ意味で使用されていると解釈する。これに対して、古いタイプのディスペンセーション主義の教えでは、「パルーシア」を患難期前の空中再臨の用語、「アポカリュプシス、エピファネイア」を患難期後の地上再臨の用語として説明し、患難期をはさんで空中再臨と地上再臨の二つに分ける聖書の根拠として使用する。しかし、これもまた、「仮説の上に乗った推論」のひとつにすぎないことが明らかである。

わたしは、長年この問題に取り組んできて思う。なぜ、このような幾つかの関連聖句のパズルを正しく解くことができないのだろう。なぜ、やすやすと誤った教えや運動に翻弄され続けるのだろうか。藤井聡太くんの詰将棋のように、丁寧にミスなく最短距離、最短時間で詰めることができないのか。私たちは、ラッド著、安黒務訳『終末論』から学びつつ、彼が提示している丁寧かつ正確な関連聖句・関連用語解釈を通じ、この問題の解決にあたりたい。

\*

## B. 関連聖句・関連用語の分析

詰め“関連聖句”解釈の第一は、パルーシア「到来」「出現」「臨在」であり、以下の三つの聖句解釈による三手詰めである。

### 1. パルーシアは、「到来」「出現」「臨在」を意味し、I テサロニケ 4:15-17 に記されている。

#### a. I テサ 4:15-17

- i. 私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。生きている私たちは、主の**来臨(パルーシア)**まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません。
- ii. 4:16 すなわち、**号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響き**とともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、
- iii. 4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に**雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会う**のです。こうして私たちは、**いつまでも主とともにいる**ことになります。
  - 1) 古いタイプのディスペンセーション主義の教えでは、「携挙」を含む空中再臨であるパルーシアは、「秘密の再臨」と教えるのだが、この聖書箇所から「秘密の再臨」を見出すことは困難である。
  - 2) この再臨には「**号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響き**」が伴っている。

- 3) 「ラザロよ、出てきなさい!」と叫ばれたイエスの叫び声は、死せるラザロを死者からの蘇生させた。
- 4) 再臨における「号令とラッパの響き」は死者を目覚めさせ、復活のからだを着せるプロセスに招き入れるのに十分な大きな音である。

b. IIテサ 2:8

- i. その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨(パルーシア)の輝きをもって滅ぼされます。
  - 1) さらに、キリストの来臨(パルーシア)は、教会を携挙し、死せる義人を携挙するだけでなく、不法の者、つまり反キリストを滅ぼすためにも起こる。
  - 2) キリストのパルーシアは「光り輝く顕現」であるのだから、これは明らかに「秘密の再臨」であるはずがない。
  - 3) さらに、この箇所はパルーシアを患難期の終わりに位置づけている。死せる聖徒たちの復活、生きている聖徒たちの携挙、そして反キリストに対する審判は、すべて同時に、すなわち患難期の終わりのイエスのパルーシアにおいて起こる。
  - 4) まさに、引用した箇所を比較対照することで、「誤りのない聖書自身の“自己証言”」を貫徹することができ、おのずとそのような自然な結論がもたらされる。

c. マタイ 24:27

- 1) 24:27 人の子の到来は、稲妻が東から出て西にひらめくのと同じようにして実現するのです。
- 2) 私たちは、イエスの言葉の中に、だれにも明らかな、栄光に溢れたパルーシアの同じ教えを見出す。
- 3) それは、栄光に溢れ、すべての人に明らかな稲妻のひらめく電光のようである。

\*

詰め“関連聖句”解釈の第二は、2. アポカリュプシス「顕現」であり、以下の四つの聖句解釈による四手詰めである。

2. アポカリュプシス一主の再臨について使用されている第二のことばは、「顕現」を意味するアポカリュプシスである。
  - i. 患難期前再臨説の立場の人々は、
    - 1) キリストのアポカリュプシスあるいは顕現を、教会の携挙とは区別し、
    - 2) キリストが世界に審判をもたらすために栄光のうちに到来する患難期の終わりの出来事として位置付ける
    - 3) もしこの見解が正しいとしたら、キリストのアポカリュプシスは、第一義的に「クリスチャンにとって祝福に満ちた望み」ではなくなる。
    - 4) 顕現(アポカリュプシス)が起こるとき、聖徒たちはすでに携挙されており、
    - 5) 肉体にあつてなした行為に応じて報いをキリストの手から受け取っていることになる。
    - 6) 彼らはすでにキリストのいのちと交わりの全き喜びに入っている。
    - 7) すなわち、顕現(アポカリュプシス)は、悪しき者の審判のためであり、教会の救いのためのものではなくってしまうのである。
    - 8) 患難期前再臨説によれば、キリストの「秘密裡の再臨」における携挙は祝福に満ちた望みであり、好ましい期待であるが、顕現(アポカリュプシス)はそうではないということになる。
  - ii. しかし、このような教えを聖書に見出すことはできない。

- a. I コリ 1:8 主はあなたがたを最後まで堅く保って、私たちの主イエス・キリストの日(アポカリュプシン)に責められるところがない者としてくださいます。
- 1) 患難期前再臨説によれば、
    - (a) わたしたちは顕現(アポカリュプシス)など待つてはいない。
    - (b) 携挙を待っているのである。
    - (c) 教会は、キリストの顕現(アポカリュプシス)の時まで苦難に会わなければならない。
- b. II テサ 1:6-7
- 1) 1:6 神にとって正しいことは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、
  - 2) 1:7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れる(アポカリュプセイ)ときに起こります。
  - 3) 患難期前によれば、
    - (a) この迫害からの安息は
    - (b) 携挙においてすでに実現してしまっており、
    - (c) イエス・キリストの顕現まで待つ必要がない。
  - 4) しかし、神のことばによれば、
    - (a) この安息は、
    - (b) 顕現(アポカリュプシス)において受け取られるべきものなのである。
- c. I ペテ 4:13
- 1) 4:13 むしろ、キリストの苦難にあずかればあずかるほど、いっそう喜びなさい。
  - 2) キリストの栄光が現れる(アポカリュプセイ)ときにも、歓喜にあふれて喜ぶためです。
    - (a) これは、燃えさかる火の試練がキリストのアポカリュプシスにおいて初めて終結することを示唆している。
- d. I ペテ 1:7
- 1) 1:7 試練で試されたあなたがたの信仰は、
  - 2) 火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり、
  - 3) イエス・キリストが現れる(アポカリュプセイ)とき、称賛と栄光と誉れをもたらします。
    - (a) 患難期前再臨説によれば、
      - (i) この栄光と榮譽は
      - (ii) それよりも前の時期、
      - (iii) 教会が携挙されるときに経験するものである。
  - 4) しかし、この箇所は、
    - (a) キリストのアポカリュプシスの目的のひとつは、
    - (b) 信仰の忠実さのゆえに
    - (c) 栄光と榮譽をご自身の民にもたらすことであると断言している。
- ii. 最後に、ペテロは

- 1) 私たちが恵みにおいて完全な者とされる望みは、
  - 2) イエス・キリストの顕現のときにもたらされると保証している。
- iii. もし、携挙と顕現(アポカリュプシス)がひとつの同じ出来事であるとしたら、
- 1) それらの箇所の意味は完全なものとなる。
  - 2) しかしながら、もしそれらの祝福が顕現(アポカリュプシス)においてではなく、
  - 3) それ以前の携挙において受け取られるものであるとしたら、
  - 4) それらの箇所はわけがわからないものになってしまう。
- iv. 顕現(アポカリュプシス)は、
- 1) 私たちにとって、祝福に満ちた望みであり続ける。
  - 2) それゆえ、携挙はキリストの顕現(アポカリュプシス)のときに起こらなければならない。
- v. 顕現(アポカリュプシス)以前に携挙が起こると主張は
- 1) 聖書のどこにも書かれていない。

\*

詰め“関連聖句”解釈の第三は、エピファネイア「輝き」であり、以下の三つの聖句解釈による三手詰めである。

3. エピファネイアーキリストの再臨について使用される第三のことばは、エピファネイアである。
  - i. エピファネイアは、「輝き」を意味する。
  - ii. 患難期前再臨説の体系によれば、
    - 1) 患難期が開始されるとき教会の携挙やキリストの秘密の再臨を指しているのではなく、
      - (a) 患難期の終わりにおける、
      - (b) 世界に審判をもたらすための、
      - (c) 聖徒を伴ったキリストの顕現を指している。
- a. IIテサ 2:8
  - i. 2:8 その時になると、不法の者が現れますが、
    - 1) 主イエスは彼を御口の息をもって殺し、
    - 2) 来臨の輝き(エピファネイア)をもって滅ぼされます。
      - (a) キリストは、「来臨の輝き(エピファネイア)」をもって
      - (b) 不法の人を滅ぼしてしまうのであるから、
      - (c) 実際に、それは顕現(アポカリュプシス)と同様の意味において使用されている。
      - (d) キリストがエピファネイ(輝き)をもって出現するのが、
      - (e) 患難期の終わりであることは明らかである。
  - ii. しかし、キリストのこのエピファネイ(来臨の輝き)は、
    - 1) キリストのアポカリュプシス(顕現)と同様に
      - (a) 信仰者の望みの対象である。
      - (b) もし教会が前もって携挙のときに望みの対象を受け取っていたのなら、
      - (c) そうなることはあり得ないからである。
    - 2) パウロは、

b. Iテモ 6:14

- (i) 6:14 私たちの主イエス・キリストの現れ(エピファネイアス)の時まで、あなたは汚れなく、非難されるところなく、命令を守りなさい。
  - (1) と勧告している。

c. IIテモ 4:8

- 1) 4:8 あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。
  - (a) その日には、正しいさばき主である主が、それを私に授けてくださいます。
  - (b) 私だけでなく、主の現れ(エピファネイアン)を慕い求めている人には、だれにでも授けてくださるのです。
    - (i) と語り、自分が勇敢に戦い、そしてキリストの裁きの御座において
    - (ii) 報酬を受け取る日を待ち望んでいる確信を表明している。
- 2) このような箇所から、
  - (a) パウロが報酬の日として期待している「その日」が
  - (b) キリストのエピファニーの日であるとしたら
  - (c) 結論できない。
- 3) したがって、それはクリスチャンが愛情を注いでいる日、
  - (a) クリスチャンの望みの対象である。
  - (b) そして、それは信仰者に報酬が授けられる日である。

ii. 患難期前再臨説は

- 1) 報酬が与えられる審判を携挙と顕現の間に位置づけている。
- 2) しかし、ここでは、患難期の終わりのエピファニーの時に位置づけられている。
- 3) それは顕現(アポカリュプシス)と同じ時である。

iii. ここで熟考されている事柄は、テトス 2:13-14 で決着

- 1) 2:13 祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるイエス・キリストの、栄光ある現れ(エピファニー)を待ち望むように教えています。
- 2) 2:14 キリストは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心な選びの民をご自分のものとしてきよめるため、私たちのためにご自分を献げられたのです
  - (a) 教会の「祝福に満ちた望み」とは、
  - (b) 大いなる神であり、私たちの救い主であるキリスト・イエスの
  - (c) 栄光ある現れ(エピファニー)なのである。

iv. 教会の携挙の時期とキリストの顕現(アポカリュプシス)と輝き(エピファニー)の時期

- 1) かなりの隔たりがあるとしたら、まことに奇妙なことになってしまう
- 2) 患難期前再臨説によれば
  - (a) 患難期の終わりのキリストの再臨は、
  - (b) 聖徒に対する報酬、義なる者の救いとか
  - (c) 無関係なものになってしまう。

- (i) 死んだ者はすでによみがえらされ
- (ii) 生きている者はすでに復活のからだに変えられている。
- (iii) 行いに対する審判評価もすでに過去のものとなり、
- (iv) 忠実なしもべたちに対する報酬はすでに与えられている。
- (d) 患難期の終わりのキリストの顕現(アポカリュプシス)と輝き(エピファネイア)は
  - (i) 救いではなく、
  - (ii) 審判を目的とするものになってしまう。
- v. しかし、神の言葉によれば、
  - 1) この輝き(エピファネー)は、
  - 2) 私たちの「祝福に満ちた望み」である。
    - (a) それは、私たちが報いを受けるときであり、
    - (b) すべての不法から贖い出され、
    - (c) 神の全き所有物となるべくきよめられるときであり、
    - (d) キリストとの交わりにおいて完全にひとつにされる
    - (e) 「祝福に満ちた望み」であ。
      - (i) このようなわけで、
      - (ii) 教会の携挙は
      - (iii) 輝き(エピファネー)の七年前ではなく、
      - (iv) 輝き(エピファネー)のときに起こる

\*

#### C. 分析の総合評価

- vi. たとえ、どのようなことばを作り出せるとしても、
  - 1) 主のパルーシア、アポカリュプシス、エピファネーの間にはどのような区別もない。
  - 2) それらは、ひとつの、同一の出来事である。
    - (a) キリストの顕現(アポカリュプシス)は、審判のみに関連した出来事ではない。
    - (b) そのことは、聖書における顕現(アポカリュプシス)と輝き(エピファネー)の
    - (c) ことばの使い方から明らかである。
  - 3) それはまた、信仰者の望みが
    - (a) その上に置かれている日であり、
    - (b) その日に信仰者は、
    - (c) キリストの再臨時に
    - (d) 救いの完全な祝福に入れられる。
- vii. 教会の携挙とキリストの顕現(アポカリュプシス)との区別は
  - 1) 神のことばによってどこにおいても主張されていないし、
  - 2) キリストの再臨に関する用語によっても要請されていない

(a) と結論を出せる。

viii. むしろ、反対に、どのような推論ができるとしても、

- 1) それらの用語は、
- 2) キリストの顕現(アポカリュプシス)が携挙と同様
- 3) 主との全き交わりに入るときであり、
- 4) 主の手から報酬を受け取る時、
- 5) つまり、信仰者の救いの日であることを示唆している。

ix. パルーシア、アポカリュプシス、エピファニーは

- 1) 単一の出来事である。
- 2) キリストの再臨を二つの部分に分割することは、
- 3) 立証されえない“推測”にすぎない。

x. 主の来臨について使用されている語彙は、

- 1) キリストの二つの到来または到来の二つの局面があるという見解に
  - 2) いかなる支持も与えていない。
    - (a) 反対に、キリストの来臨が
    - (b) 単一、かつ不可分な
    - (c) 栄光に満ちた出来事である
- (i) という見解を立証している。

\*

#### D. 結語

<ローザンヌ誓約・第 15 項、キリストの再臨>には、「私たちは、イエス・キリストが救いと審判を完うするために、力と栄光のうちに、人格的、可視的に再臨されることを信じる」と誓約されている。この再臨の出来事は、患難期の後に生起する、携挙を含む空中・地上一体の単一の再臨であることを聖書が“自己証言”していることを見てきた。

私たちは、旧約聖書の影—「イスラエル民族の栄光の回復」を軸とした解釈原則、つまり使徒たちとは異なる解釈方法に縛られるべきではない。新約の使徒たちの「福音理解」を歪曲すべきではない。新約聖書の光—「イエス・キリストの人格とみわざの卓越性」を軸とした解釈原則にのっとり、新約聖書自身の“自己証言”している自然な理解に立脚すべきである。

キリストは「眠った者の初穂」として死者の中からよみがえられた( I コリント 15:20)、私たちは「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられる。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられる。この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになる」(15:52-53)。

私たちは、約二千年前のキリストの復活の日、イースターを振り返りつつ、今日私たちは私たちのイースターの日—復活のからだを着せられる日—「祝福に満ちた望み」(テトス 2:13)の日を待ち望みたい。

【聖書朗読箇所】

I コリ [ 15 ]

15:1 兄弟たち。私があなたがたに宣べ伝えた福音を、改めて知らせます。あなたがたはその福音を受け入れ、その福音によって立っているのです。

15:2 私がどのようなことばで福音を伝えたか、あなたがたがしっかり覚えているなら、この福音によって救われます。そうでなければ、あなたがたが信じたことは無駄になってしまいます。

15:3 私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、

15:4 また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、

15:12 ところで、キリストは死者の中からよみがえられたと宣べ伝えられているのに、どうして、あなたがたの中に、死者の復活はないと言う人たちがいるのですか。

15:13 もし死者の復活がないとしたら、キリストもよみがえらなかつたでしょう。

15:14 そして、キリストがよみがえらなかつたとしたら、私たちの宣教は空しく、あなたがたの信仰も空しいものとなります。

15:15 私たちは神についての偽証人ということにさえなります。なぜなら、かりに死者がよみがえらないとしたら、神はキリストをよみがえらせなかつたはずなのに、私たちは神がキリストをよみがえらせたと言って、神に逆らう証言をしたことになるからです。

15:16 もし死者がよみがえらないとしたら、キリストもよみがえらなかつたでしょう。

15:17 そして、もしキリストがよみがえらなかつたとしたら、あなたがたの信仰は空しく、あなたがたは今なお自分の罪の中にいます。

15:18 そうだとしたら、キリストにあつて眠つた者たちは、滅んでしまったことになります。

15:19 もし私たちが、この地上のいのちにおいてのみ、キリストに望みを抱いているのなら、私たちはすべての人の中で一番哀れな者です。

15:20 しかし、今やキリストは、眠つた者の初穂として死者の中からよみがえられました。

15:21 死が一人の人を通して来たのですから、死者の復活も一人の人を通して来るのです。

15:22 アダムにあつてすべての人が死んでいるように、キリストにあつてすべての人が生かされるのです。

15:23 しかし、それぞれに順序があります。まず初穂であるキリスト、次にその来臨のときにキリストに属している人たちです。

15:24 それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる權威、権力を滅ぼし、王国を父である神に渡されます。

15:25 すべての敵をその足の下に置くまで、キリストは王として治めることになっているからです。

15:26 最後の敵として滅ぼされるのは、死です。

15:35 しかし、「死者はどのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか」と言う人がいるでしょう。

15:36 愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ生かされません。

15:37 また、あなたが蒔くものは、後にできるからだではなく、麦であれ、そのほかの穀物であれ、ただの種粒です。

15:38 しかし神は、みこころのままに、それにからだを与え、それぞれの種にそれ自身のからだをお与えになります。

15:39 どんな肉も同じではなく、人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉、それぞれ違います。

15:40 また、天上のからだもあり、地上のからだもあり、天上のからだの輝きと地上のからだの輝きは異なり、

15:41 太陽の輝き、月の輝き、星の輝き、それぞれ違います。星と星の間でも輝きが違います。

15:42 死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蔭かれ、朽ちないものによみがえらされ、

15:43 卑しいもので蔭かれ、栄光あるものによみがえらされ、弱いもので蔭かれ、力あるものによみがえらされ、

15:44 血肉のからだで蔭かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。

15:47 第一の人は地から出て、土で造られた人ですが、第二の人は天から出た方です。

15:48 土で造られた者たちはみな、この土で造られた人に似ており、天に属する者たちはみな、この天に属する方に似ています。

15:49 私たちは、土で造られた人のかたちを持っていたように、天に属する方のかたちも持つことになるのです。

15:50 兄弟たち、私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。

15:51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます。

15:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

15:53 この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。

## I. 来臨(パルーシア)

### I テサ

4:15 私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。生きている私たちは、主の来臨(パルーシア)まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません。

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

### II テサ

2:8 その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨(パルーシア)の輝きをもって滅ぼされます。

### マタ

24:27 人の子の到来(パルーシア)は、稲妻が東から出て西にひらめくのと同じようにして実現するのです。

## II. 顕現(アポカリュプシス)

【新改訳 2017】

### I コリ

1:8 主はあなたがたを最後まで堅く保って、私たちの主イエス・キリストの**日(アポカリュプシ)**に責められるところがない者とさせていただきます。

IIテサ

1:6 神にとって正しいことは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして痛みを与え、

1:7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から**現れる(アポカリュプセイ)**ときに起こります。

Iペテ

4:13 むしろ、キリストの苦難にあずかればあずかるほど、いっそう喜びなさい。キリストの栄光が**現れる(アポカリュプセイ)**ときにも、歓喜にあふれて喜ぶためです。

Iペテ

1:7 試練で試されたあなたがたの信仰は、火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり、イエス・キリストが**現れる(アポカリュプセイ)**とき、称賛と栄光と誉れをもたらします。

### III. 輝き(エピファネイア)

Iテモ

6:14 私たちの主イエス・キリストの**現れ(エピファネイアス)**の時まで、あなたは汚れなく、非難されるところなく、命令を守りなさい。

IIテモ

4:8 あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。その日には、正しいさばき主である主が、それを私に授けてくださいます。私だけでなく、主の**現れ(エピファネイアン)**を慕い求めている人には、だれにでも授けてくださるのです。

テトス

2:13 祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるイエス・キリストの、栄光ある**現れ(エピファネー)**を待ち望むように教えています。

2:14 キリストは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心な選びの民をご自分のものとしてきよめるため、私たちのためにご自分を献げられたのです。